
山手線の女

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山手線の女

【Zコード】

N77761

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

俺は駅の近くで奇妙な女に会った。

俺は浜松町駅近くの会社に勤務している。

実に平凡な男だ。三十代、独身。彼女は三年いない。

そんな俺が、ある日の帰宅時、妙な女に出会った。

その女は、黒いベレー帽に黒いスカーフ、黒いセーターに黒いロングスカート、黒い靴と、黒沢くめの女だ。

容姿は美形に入るだろつ。いや、間違いなく美人だ。女優の小雪がもうちょっと怖い顔になつた感じ。

その女は、俺が駅に向かう時に通る路地にいた。

間が悪かったのか、周囲に俺しかいなかつた。

何となく普通ではない感じだったので、田舎を合わせないよつじて通り過ぎようとした。

ところが、女は俺の前に立ちふさがつた。

「何ですか？」

つい、敬語で訊いてしまつた。女は能面のよつて無表情なままで、

「品川」

とこをなつ言つた。俺はキヨトンとしてしまつた。すると、

「品川ー。」

女は語氣を強めて言つた。それでも俺には意味がわからない。

「品川の次はー?」

遂に女は俺に掴みかかつて來た。俺はようやく女の言いたい事が
わかり、

「大崎?」

と探るよつに言つた。すると女はかすかに微笑んで、

「五反田」

俺は逃げよつと思つたが、女が俺に張り付くよつて立つてゐる
で、逃げる事ができない。

しかも、よく見ると奇麗な若い女性なので、ちよつとだけ付き合
つてみよつと思つてしまつた。

それが間違ひの元だつた。

「田黒」

「恵比寿」

「渋谷」

「原宿」

「代々木」

「新宿」

「新大久保」

「高田馬場」

「田口」

そんな感じで、俺と女は駅名を言い合つた。

しばらく進んで、

「上野」

女は一ヶとして言つた。俺は次を言おうとしたが、度忘れしてしまつた。

あれ？ 上野の次は？ えー、出て来ない……。あれー、どうしてだ？ 上野まではよく行くのに……。

「五秒前」

女が腕時計を見て呟いた。は？ 何だよ、それ？

「四、三、一、一、ゼロ。タイムアウト。失格です

「失格?」

俺はまたキヨトンとした。女はニヤツとして、

「残念だったわね、最後まで言えたら私とデートできたのにね」

「……」

女は高笑いをしてから、

「御徒町、秋葉原、神田、東京、有楽町、新橋、浜松町、田町」

と言い、立ち去ってしまった。

俺はデートできなくて、運が良かつたのだろうか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776i/>

山手線の女

2011年10月5日01時38分発行